



YNAC通信

2010. 6. 20 NO. 27

生業から正業へ

松本 毅

10年前、沖縄で開催されたJES（日本エコツーリズム協会。当時はエコツーリズム推進協議会）設立総会で、私はYNACの事例発表をしました。自然の楽しさと素晴らしさを知り、それを愛し守りたいという意思を育もうという思想がYNACのエコツアーである、そのためにエコツアーガイドとして自ら研鑽を積み、インタープリテーションを通じて自然と人をつなぐという重要な役割をになってゆくという宣言のようなものでした。それ以降JESの大会等でたびたびパネリストやコーディネータなどを務め、またエコツアーガイド養成講座などの講師としてエコツーリズムの普及のため全国各地を飛び回ってきました。

ところが2008年のJES小笠原大会の帰路のこと、会議の余韻さめやらぬ参加者一同は、小笠原丸25時間の航海で揺られながら熱く未来を語り合っていました。そこへ「ガイドはいまだに世間から正業とは認識されていない」と冷水をあびせるような指摘があったのです。都会生活に適應できないドロップアウト組が僻地でとりあえず食っていくための仕事程度にしか思われていない、ということです。これには関係者一同愕然となり、押し黙ってしまいました。しかし考えてみれば5年前、屋久島でガイドの登録・認定制度の議論が始まったときの、事務局側から出されたガイドにたいする評価も、似たようなものでした。それからの長い長い議論と実践の中でようやく屋久島ではガイド業に対する認識が変わりはじめ、それどころか島内のガイドへの意欲的な転業はむしろ増加してきました。しかし、やはりまだ一般には、安易

な職業というイメージが払拭されていないのも現状です。

JESの中でも、これまでは行政、旅行社、研究者が議論の中心で、現場のガイドがエコツーリズムに関する議論に入る機会は多くはありませんでした。この現状を打開すべく、JES内部でガイド部会を発足させ、ガイド業側から協会の理事の椅子を獲得し、発言の立場を築いてきたところです。全国各地の現場で抱える問題を拾い上げ、議論が展開できるようになることを期待しています。また、2007年にエコツーリズム推進法が成立しました。その中でガイド業者は「特定事業者」として「観光旅行者に対し、自然観光資源についての案内又は助言を業として行う者」と位置づけられています「ガイド」もしくは「エコツアーガイド」という言葉は使われていないのですが、少なくともこれでガイドという仕事の法的な裏づけができたこととなります。

昨年、JES設立10周年記念大会が東京で開催されました。テーマは「エコツーリズムの新たな役割と展望をさぐる～これまでの10年、これからの10年」でした。

私たちは、真摯にエコツアーガイドとしての仕事を続けることで、未来への責任を果たしたいと願っています。と同時に、さまざまな手段を通じて、ガイドという仕事の重要性を世に語り続けてゆく義務があるとも思っています。これからの10年は、ガイド業がステータスの高い、収入の安定した「正業」として世の中に認識されるようにさまざまな方策を考え、努力をしていかなければならないと考えています。

思い出は美しく

ブレず、綺麗な色使い
櫻村精一

屋久島へ何度も旅行できる人は少ない。リフレッシュ、家族サービス、レジャー、有給消化…。色々な目的で、「憧れ」を動機に、ハワイより高額な屋久島旅行で、記念写真を撮らない人は、まずいません。

近頃は、防水カメラが増えました。防水機構はオリンパスやペンタックスのカメラがメインでしたが、フジフィルムやキャノンにも防水仕様が現れ、今や基本仕様の一つです。

お客様のカメラをチェックし始めて約5年。意外なことにほとんどの人が、「ただシャッターを押すだけ」の写し方をしている。それでは「写ルンです」と同じです。もったいないですよ。

そういう人に読んで欲しい今回の記事は「たった3つの機能」で綺麗な画質！カメラの使い方です。ツアー中にお客さんに、お節介ながらしてしまうカメラの話のまとめです。でも、

一番の基本は

ブレない写真をとること

だけです。とにかく、何でもいからカメラをちゃんと固定して撮る。固定方法？三脚を買うか、手近の岩や木に押し付けるか、脇を締めてしっかり持つか…これは各自工夫のしどころでしょう。

さらばAUTO、ようこそマニュアル操作

カメラを「道具として使う」

シャッターボタン近くのダイヤルなどに、PとかMとかSとかAとか書いてあるはずですが、「P」か「M(これはより巧い人むけ)」にしましょう。これでAUTO撮影とおさらばです。



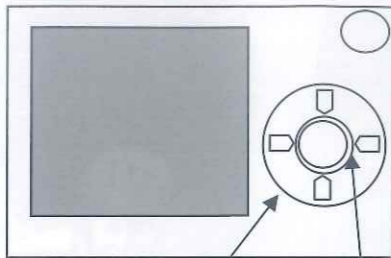
↑手元のダイヤルをこういうマークにあわせてから撮ってみましょう。全てはこのモードから始まります。

わかってほしい3つの言葉

- 1・露出補正→明るさを決める
 - 2・ホワイトバランス→色合いを決める
 - 3・ISO→集光力
- です。この三つで、写真は綺麗になります。

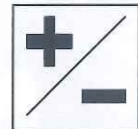
露出補正

手元のカメラの操作パネルは大抵↓



こんな感じでしょう。ここにはいろんなマークがあるはずですよ。

マークもいろいろある中で、



これが「露出補正」のボタン。IXY など、無いものもありますが、そういう時は FUNC ボタン(または MENU)から調節できます。

露出補正は写真の仕上げの明るさを決めるもので、「0.3」または「1/3」刻みで調節します。プラスは明るく、マイナスは暗め。森の中だとちょっと暗めの-0.3 ぐらいがいいですが、これは個人の好みです。好きにしてください。私は暗い写真が好きなので、-0.7 や-1.0 です。以前、白谷雲水峡でハッセルブラッド(憧れのカメラ)を使っていた人が居て、「露出は1刻みで変えるもので、1/3刻み、なんてのは駄目だ」と言っていました。人の意見はさまざまです。

そして綺麗な空、紺碧の海など、青っぽいものを綺麗に撮りたい時も露出をマイナスに。マイナス露出では色が濃く、はっきりした写真に仕上がります。

画面で仕上がりが確認しながら、露出の調節を行う、というのはフィルムカメラには出来ない芸当で、デジカメの最大のメリットの一つなのです。

ホワイトバランス(White Balans→WBとも)

撮影時の天気に合わせて「最適な色」を決める機能で、とりあえず「MENU」を押してみると、ホワイトバランスの項中に

- ・AUTO
 - ・晴れ
 - ・曇り(曇天)
 - ・電球
 - ・蛍光灯
 - ・カスタム などが表示されると思います。
- ホワイトバランスは、撮影現場の天気に

合わせて変えればいいのですが、いつでも晴天でやる人もいます。

「カスタム」はぜひ慣れて欲しい機能。説明書でも理解しづらい。ホワイトバランスを「カスタム」にすると、「～で白データ取り込み」「～で調節」などと表示が出来ます。「～」に書いてあるボタンは、シャッター DISP. MENUのどれかで、そしたら何でもいいので白い物に向けて、これらを2秒ぐらい押せば、「現在見えている白色」をカメラが取り込み、他の色の基準にして、写真を最適に表現するようになります。

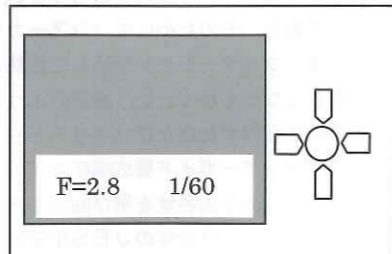
ISO(「イソ」と読む)

カメラが光を集める能力。数値が大きいほど短時間で明るく撮れます。

掛け算の式では
現場の明るさ × ISO × シャッター時間
⇒ 写真
と思って下さい。

写真は「Photograph」の訳ですが、本来は Photo=光、graph=画で「光画」といいます。だから「光」を十分集めないと、画になりません。ISO が大きいと、光を集める力が強いので、周囲が暗くても撮影できて、シャッター時間も短くできます。が、高 ISO では仕上がりの悪い、ザラ付いた写真になります。普通は ISO400 以下でやるべきです。

大体1/60秒よりも短くシャッターが切れるなら、手ブレはほぼありません。でも手ブレ防止はONにしましょう。コレもMENUにあるはずですよ。



↑シャッター半押しで、シャッタースピードと絞り値(F値)が画面に出る

絞り値(F値)の話ははややこしいので、今回はやりません。小さいほど「絞り開放」といって、明るい写真になります。

※半押し:シャッターを浅く押すこと。自動車の半クラに似たようなもの。ピントを固定するための技。浅く押すだけの簡単な技です。撮りたいものにピントを合わせて、半押し。

ピントが合えば、ターゲットが緑に変わる。

カメラマンを分類すると「決定的瞬間派」と

「ニューカラー派」になるらしいですが、

★決定的瞬間派

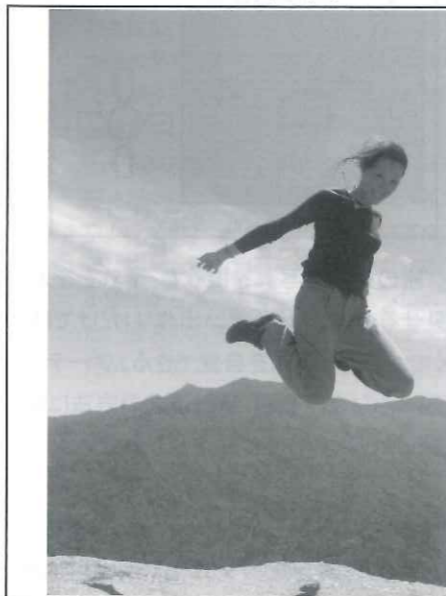
ピントを一点に絞り、それを強調したい派
→偶然のチャンスをモノにしないとだめ。

★ニューカラー派

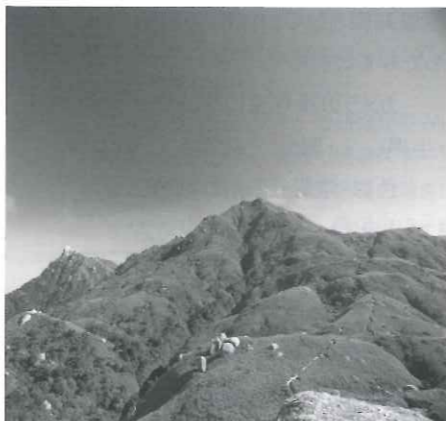
カメラに映る全てをきっちり写す派
→写真に、テーマや構図が無いと退屈。

と分類するらしい。みなさんはどちら派？

決定的瞬間派は天才肌の人が多いそうです。シャッターチャンスを逃さないのが、シッカリと対象を見て、普通の人なら気づかないような瞬間に「気を止め」ないといけなからです。ニューカラー派の写真は、技術があれば誰でも撮れます。それが面白いかどうかは別として、ブレなければいいので、でも構図や色彩の知識がないと退屈です。主に風景やポートレートになります。



↑決定的瞬間はスポーツ写真系。チャンスがなければ、作って撮る。よくやるジャンプ写真。暗い場所では難しい。



↑全てにピントのあつた写真。風景画に多い。

その場全てを、きっちり写す。

メーカー別・カメラの特徴

お客様のカメラで一番多いのは何か？

正確に統計は取ってないのですが、たぶん・IXY(キャノン)

・LUMIX(パナソニック)

・FINE PIX(富士フィルム)

・EXILIM(カシオ)

の4つでしょう。COOLPIX(ニコン)が意外と少ない。これはいいカメラなんです。天柱石が全部写る！色も綺麗、操作は最低限のものだけ。SONYのSiberShotも減ったと思う。

ごく稀に、RICOHのRやGXシリーズを持つてくる方が居ますが、私個人もGXをよく使うため、こういうお客さんに遭うと非常に嬉しい。マクロ撮影の輪郭が超シャープ。コケの撮影には最適です。ただし、湿気に極端に弱く、雨の日や宿泊登山には絶対不向きです。朝露が付くだけでも怖い。

オリンパスμシリーズは水遊びの機会が多い夏になると増えるような気が。フィギュアスケートをみんなが見る冬に、浅田姉妹のCM効果で、夏に向けてオリンパスを買ってもらおう、という戦略なのかも知れない。防水は完璧…と思いきや、やはり湿気を浴びると中身は結露し、液晶や操作に支障が出ることは十分あります。カメラの中身は真空ではありませんので。

さて、上述のカメラの中で、一番使いやすいのはIXYとLUMIXです。画質ならFINEPIX、カメラの頑丈さならオリンパスμ、コンパクトさと動画なら EXILIM、マクロにこだわるならRICOHです。

COOLPIXとSiberShotの両者も捨てがたい。宣伝下手なのか、少数派ですが、画質・操作ともに満足いくものだと思います。

IXYとLUMIXはコケや花も、風景も抜群に撮れるカメラです。一眼レフよりよっぽど綺麗で、今売れているものは、今後10年は買い換えなくてもいいものばかりです。操作も他機種に比べて大変簡単で、マニュアル操作も画面表示に沿って操作するだけ、とても親切なガイダンスです。それすら面倒だというなら AUTO で撮ってください。

自信の持てるカメラがいいカメラ

LUMIX は大変綺麗な絵がその場で再生

できます。お客さんが「自分で撮ったとは思えない」と言っていました。ネイティブビジョン所属のガイド・神崎くんが、北米アラスカのマッキンリーに行き、氷河を乗り越えて標高6000mの山頂で記念撮影をした、そのカメラはLUMIXでした。広角に映る綺麗な青空は、15万円台の一眼デジカメに決して劣らないものでした(低温に耐えられないのは記録カードや電池のほうで、カメラ自体は氷点下でも大丈夫な事が多いらしいです)。

オリンパスは、カメラのモニターと、再生時のパソコンの画面と、現像時の様子がなんだかみんな違うので「現場での満足感」が少ない。耐久性は抜群でも、モニター性能が他に比べて悪いような気がします。

カシオのEXILIMも同じで、この2機種はこれで随分損しているのではないかと。以下、ヨドバシカメラ梅田店の店員と私との会話。

「EXILIMの長所は？」→「ボディが薄い」

「他には？」→「うーん…動画かな」

「スロー再生面白いですね」→「飽きますよ」

「タッチパネルになりましたよね」→「もう、オリンパスもキャノンもどんどん採用してます。

オリンパスμ-Toughなんて、スキー場でグローブのまま使えるように、ボディを上から軽くトントン叩くとシャッター、右から叩くと画像再生、左から叩くと露出変更…」

さすが耐久性を追及するオリンパス、「カメラが現場でどう使われるか」を知っている。砂で揉んでも海水を浴びせても、一年間の無料保証というのは大したモノだと思う。

残念なことに、カシオ、オリンパスとフジはマニュアルの操作が少しヤヤコシイ。

操作が簡単だと、撮りたい絵を苦勞なく撮れて、再生してそれが綺麗だと「やった！」と思う、するとまた撮る気が出る…。この「よい循環」がIXY・LUMIXにはあると思います。

自分自身の趣味を知ろう

撮影に最も大切なのは自分自身を知ることです。例えばどんな絵が好きですか？

レンブラント、フェルメール、ゴッホ、ミレー、ダヴィンチ、はたまた北斎、棟方志功…

写真家なら、私はあまり知らないけれど森山大道とか土門拳とか荒木経惟とか。

色々見ていると、自分がいいと思う作品には共通の特徴があると気づく、要するに自分自身の好みが見つかる。そういう経験が「自

分が満足できる写真」を撮る為には絶対必要です。自分の欲しいものを知らないと、どういふ写真を撮ればいいのか解らず、満足できない。ただ目の前のものを、「綺麗・珍しい」と言われて撮っても、それはやがて、飽きて見向きもなくなる。自分が撮った写真なのに、それについての思い出がない写真になります。花や山をひとつ撮るにも、作品には撮影時の姿勢、逆光順光、天気状況など、その写真を撮った瞬間の事実が全て写っています。「それを撮ろうと思った動機」を覚えておく事が、旅の思い出、ひいては「カメラを使って」自分自身の審美眼を磨き、満足を知る方法になります。

だから、いいと思った写真は、ちゃんと現像してアルバムに貼って、人に見せて解説しなきゃならない。自宅プリントより、お店に任せる。プリンターの性能が断然違う。インクを気にせず、ゴミが出ない。出てくる写真が綺麗でないと、やる気が出ません。

カメラの中の色使い

- MENU の中には
- ・コントラスト(影の濃さ)
- ・彩度(色の濃さ)
- ・シャープネス(輪郭の強さ)

という3つの項目があります。色の濃さ、明るさの度合いを変えて、緑をより鮮やかにしたり、夕日をより赤く、などの設定が出来ます。ホワイトバランスを設定して、また色を変化させて撮影するのは、少し面倒ですが、慣れると「これをやらなきゃ気が済まない」になるでしょう。私は「シャープ最強、色をやや薄め」に設定します。



↑チョウテンゴケ 緑濃く影も濃く。マクロ撮影は単純構図でも撮りやすく、面白い。顕微鏡代わりにも。緑と黒のシンプルな色使い。

作品に一番大事なのは構図だと思います。絵はゼロから全てを作りますが、写真は「自然そのものを切り取る」ので、構図しか作れないのです。上達の為に、自分が動いて、ひたすら写真を撮る。どんどん撮って練習して、人に見せる。写真集を見たり、展覧会に行く。デートにも目的ができて、いいですね。人の作品の長所を見つけたら、批評しないで、とりあえず真似するといいでしょ。

そして、ブレない写真を撮る。何がどこに写っているのかが明確な写真が、いい写真の第一歩。それがいい色で出せるようになれば、なおさら良い。つまりは①構図を決めたらしっかり構え、ブレずに撮る。簡単な構図では

画面を上下あるいは左右に二等分したとき、上下・左右の色のバランスが取れている、または明暗をはっきり分ける(他に三分割法というのもあります)。すると解りやすい写真になります。



↑右半分を巨木で黒い部分に、左の空間にお客さんを小さく。空間と人で、木の大きさを強調。

いい色だったらなお良いので、

- ②シャープさ・色使いは個人の好み。私は
- ・少し暗くて(露出の低い)
- ・彩度の高い(ヴィヴィッドな)
- ・輪郭のシャープな、硬い写真


が好き。左のチョウテンゴケの写真などまさにこれです。

この中で、設定どおりに機械がやってくれるのは②の3つだけです。①については鍛錬と創意工夫を。白黒モードで練習するのがいいと思います(MENUの中に、画質調節というのがあり、セピアや白黒など、色合いの調節が出来ます)。

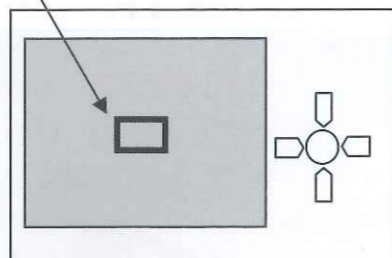
たまには白黒で撮ると、とてもスッキリした写真に見えて、非常に楽しめます。自分の両親とか、自宅とか、路地裏の野良猫とか。身近な被写体が新鮮にみえます。



↑キノコ。マクロ撮影。ピントはキノコの柄に。

マクロ撮影は花マークを選んで撮影しますが、ピントは画面中央の一点に合い、その手前も奥もボケます。このボケ風味も作品の味わいになります。

この枠がターゲット。半押しでピントが合うと、ピッと音がして枠が緑色に変わる。色が変わらないとか、赤くなった場合はピントが合っていない。



旅の途中で写真を撮って、それを人に見せるのは、単に「思い出作り」だけではなく、自分の趣味を自覚できる、アーティスト的な自己表現・自己追求の方法になりうるのではないかと、私は思うのです。

参考文献

- 「究極超人あ〜る」：ゆうきまさみ著 講談社
- 「たのしい写真」：ホンマタカシ著 (2009) 平凡社
- 「入門！撮る百名山 屋久島」(2008) 志學社

カメラを勉強したい、うまくなりたい人は、基礎知識として、以下の用語について、学んでみてください。

カメラの操作法について

- ・半押し
- ・測光
- ・ピント
- ・マクロ
- ・色彩・陰影・明暗について
- ・コントラスト
- ・シャープネス
- ・彩度
- ・諧調

構図について

- ・日の丸構図
- ・対角線構図
- ・三分割法
- ・黄金比

まだまだ他にもいろいろありますよ。



僕は東京八王子、高層マンションの立ち並ぶ多摩ニュータウンで育った。小学校時代、裏山や学校の周りではベニシジミやアオシジメが普通に飛んでいて、友達と昆虫採集に出かけていた。しかし、少しずつ街の開発が進み、身近だった蝶も現れることが少なくなり、遊ぶ場所は“自然”から離れていった。

そんな環境でも、家族はアウトドアが大好きだった。週末は家族全員がボーイスカウトで活動していた。この時期にアウトドア技術や自然の知識を体で覚えたと思う。小学校から高校生まで本格的に参加していた。週末のお稽古事としてはマイナーだったが、このフィールドワークのお陰で学校の理科のテストはバッチリできた。このボーイスカウトの経験が、自然科学に興味を持つようになり、「ガイドになろう！」と思えたきっかけだ。

さて、今回は研修生生活について話したい。まず、YNA C研修には課題がある。これをクリアし、3級ガイド認定試験に合格して初めてスタッフとしての資格が得られるのだ。課題はシンプルで、ツアーを2種類できるようになる事。「白谷雲水峡」と「リバーカヤック」の2ツアーが僕の課題で、これは歴代の研修生がYNA Cの門を叩き、通ったのと同じ道だ。

まず、カヤックツアーの研修がGW以降本格的に始まった。道具に頼るスポーツなので準備が大変なのだが、最初の驚きは、1台の車に乗せる船の数。車の中に7艇、外に大きな船を2艇積める。先輩は慣れた手つきで船をパズルのように車内に詰め込んでいく。そして、そのぎっしりと詰まった車を「さ、運転して」と言われ、ツアーの始まる船着場までびくびくしながら運転

スタートラインに立つ

比留間雄太

する。落ち着く暇もなく、その後ツアーが開始する。今思えば、このように驚きの連続に翻弄され、あっという間に時間が過ぎるのは、実は面白い時でもある。

こうしてツアーは始まり、僕は1日補助役に徹する。船の乗り降りの補助や昼食時の火お越しや焼きそば作りなど。火お越しは幼少期のボーイスカウトで慣れていたのだが、市川さんは僕のその焚き火法を一掃した。「キャンプファイヤーじゃない！」火力ではなく、安定力重視の『市川焚き火術』を叩き込まれる(自身の経験を覆されるのはなかなか悔しいものだった)また、研修生はお客さんへカヤックの見本を見せる大仕事がある。ツアーの途中に「荒川ダム放水口」という水量・勢い共にある場所をみんなヒヤヒヤしながら横切るのだが、ここで僕の出番だ。研修生としてどんな状況でも果敢にこの流れに攻め入るのだが、誰でも最初は初心者だ。あっさり転覆し、研修1ヵ月目にして大事な眼鏡が川底に沈んでいった。この後、車の運転ができず、新しい眼鏡が島に届くまで1週間、使い物にならない研修出づなだった。

またツアー後には反省会をする。反省点は色々出るが、屋の焼きそばの出来ばえも重要な反省内容だ。このさまざま反省を積み重ね、研修課題の1つ目、カヤックツアー

はクリアした。そして夏以降、2つ目の課題「白谷雲水峡」の森歩きツアーが本格的に始まった。こちらはカヤックツアーに比べ苦勞した。カヤックは道具を使い「水で漕ぐ」という日常では味わえないスポーツで、上手く乗る事さえできればお客さんの満足度は高い。しかし、森歩きツアーの場合「歩く」行為は日常的なものだ。1日の価値を高めるために、ガイドは大きな責任を背負っている。知識、話術、ホスピタリティー、景色の見せ方、etc。僕には足りないものが多い。いつになればガイドになれるのかと感じてしまう事もあった。でも不思議なことに、凹んだ後には必ず気が合いがみなぎってくる。自分の課題がしっかり見えてくるからだろう。凹む事を恐れず！を忘れずにいたい。

また、自らの足で歩く森の中は、いつも新鮮な発見がありとても面白い。マニアックだが足元に「冬虫夏草」「変形菌」を初めて見つけた時は“少年”に戻った。森の中で新たなものに遭遇すると、目は子供のように輝く。その積み重ねはガイドをする上でとても大事なことだ。新たな知識を得るとその先の新たな世界がもっと広がる。それがあから森歩きツアーは好きだ。

ガイド業を意識してからまだ日が浅いが、最初の目標の一つに「東京の友人達をガイドする」がある。都会でも桜が咲けば春を感じるように、案外自然は身近に存在する。当たり前なことだ。でもそれが若い人にとって、少しずつ遠い存在になっているのも事実だろう。僕もその渦の中で育った一人だ。だからこそ感じる自然の魅力をこれから伝えて行きたい。「3年後には案内するよ。それが目標」と言って東京を離れて1年。今ようやく研修生を卒業し、YNA Cのガイドとしてスタートラインに立つ。



黒味岳で花崗岩の成り立ちを解説する。2010年9月

昨年秋、神戸から屋久島まで、につぼん丸のクルージングに同行する機会を得ました。豪華客船で優雅な屋久島クルーズの体験です。とは言え一応今回は日野工業高等学園の研修旅行に同行して、屋久島の環境問題などについて、1時間くらい船内で講義をするのが私の仕事でした。

ここ数年、屋久島でも、につぼん丸をはじめとして、飛鳥、ばしふいっく・びーなす、富士丸などによるクルーズ船の寄港が増えています。しかし、朝

屋久島に入港し、夕方には旅立って行くというツアーなので、屋久島を観光するという意味では、非常にもったいない感じがしていました。「せっかく屋久島に来たのだから、もっとゆっくりと屋久島を楽しんでいけばいいのに」。

ところが最初の昼食で相席したご婦人の話を聞いて、それが見当違いであったことが判明しました。につぼん丸にも7回ほど乗っているというリピーターで、外国客船でカリブ海クルーズにも参加したというおばさま曰く、「屋久

島はどうでもいいのよね。本当はずっと船に居てもいいんだけど。まあタクシーで少しまわってみるわ。」とのこと。目的はあくまでクルージングそのものなのです。それではそのクルージングの魅力とはいったいどこにあるのでしょうか？

神戸で前泊した私は、メリケンパークのオリエンタルホテルで優雅な朝食をとりました。ポートタワーを背景に六甲の山並みを一望にするリッチなホテルからこのクルージングがはじまり



につぼん丸 航海記

市川聡

ます。

ホテル2階の搭乗口へ行くと、ギターの生バンドが軽やかな音楽で出迎えてくれます。チェックインを済ませると、白人男性ポーターがさっと荷物を持って船内へ導いてくれます。乗船すると直ちに船内スタッフに荷物を預けて、今度はアジア系の女性スタッフが船内の個室まで案内してくれます。至れり尽くせりのサービスで、思わずチップの心配をしますが、くだんのおばさまに聞いてみたところ、ここは日本だからチップの心配はいらないとのこと。いきなり外国へ来たかのような、非日常の演出こそが、クルージングの魅力の鍵となっています。

乗船するととにかく外国人スタッフが多いことに驚かされます。につぼん丸にはクルーが200名ほど乗っているようですが、半数以上が外国人スタッフで、そのほとんどがフィリピン人だそうです。につぼん丸を運行する商船三井は、1993年にフィリピンに船員学校「マグサイサイ・インスティテュート・オブ・ SHIPPING」を設立。短大卒相当の商船学校の卒業生を受け入れ、年間240名ほどを教育しています。ここで教育を受け、日本語も少し話せるフィリピン人が、スタッフの主力となっています。1年のほとんどを船の上で暮らす仕事は、現代の日本人の若者では長続きしないそうで、こうした学校

を持っていないと船員を確保できないという現実があるようです。日本語が話せるというのは非常に貴重で、せっかくスタッフ教育をしても外国客船に引き抜かれることが悩みの種だそうです。

船内での食事は、大食堂で行われます。グループで来ている人達は、グループでかたまるわけですが、1人で参加している人も多く、そうした人達は相席で食事を楽します。そこでクルージングに慣れた人達は、旧知のごとく親しく会話を楽します。こうした出会いもまたクルージングの魅力のようです。そんなクルージング常連客は、当然のごとく名だたるクルーズ船に乗

船経験があり、それぞれを比較して評価してくれます。「飛鳥はちょっと気取っていて、ふんって感じ。」「につぼん丸はもうちょっと庶民的で、親しみ安い。」「ばしふいっく・びーなすはより庶民的で悪くない。」ある程度の親しみ安さも、クルージングには重要だということのようです。

衆目の一致する所によると、につぼん丸の特徴は、なんといっても食事がおいしいこと。「食のにつぼん丸」と言われるだけあり、乗船中同じメニューは絶対に出ないそうです。101日間の世界一周クルーズに参加したというご婦人も、同じメニューは全くなかったというから、かなりのものです。

今回のウエルカム・ディナーのメニューを紹介すると、前菜に戻り鱈のカルパッチョ、イクラ添え。スープにオニオン・グラタン。続いて魚料理に真鯛と雲丹のパートブリック包み焼き、サフランソース。これでメインは終わりかと思いきや、口直しの氷菓、アセロラのグラニテの後に、肉料理/牛フィレのシャリアピン風ステーキ、トマトと椰子の新芽サラダ、につぼん丸特製パン。ただ船に乗ってぶらぶらしているだけでは、かなりのボリュームで満腹度が高い。デザートはアールス・メロン、ガトー・フランボワーズ、マカデミアナッツ・アイスクリーム添え。めったに食べることのないフルコースを満喫しました。ちなみにアルコールは別料金です。

このようなごちそうを食べるためには、やはり腹を空かしていないともったいない。ということで船内でも様々なエクササイズができるようになっていきます。4階のプロムナードデッキは、ぐるりと船を一周できる300mの周回コースとなっており、オリエンテーションでは走るなどと言いましたが、ジョギングやウォーキングを楽しむ人達の姿がありました。また年齢層を考慮しての座ってできるフィットネス教室やデッキゴルフ教室など様々なミニエクササイズ教室も開催されます。私の生徒達は、バスケットボールのリングなどで汗を流していました。

ところでこのフルコースディナーは、正装して臨みました。日によって夜のドレスコードが指定されており、この日はインフォーマル。男性はスーツや

ブレザーにネクタイやチーフ。女性はワンピースやスーツなどにアクセサリで華やかに演出した装い。ということで若いも若きもこぞって着飾って夜のパーティーへと参加します。

正装を指定されるとなんとなくめんどろな感じがしますが、実はこれこそが重要な非日常の演出なのです。

こうして着飾った夜には、イベントが盛りだくさん用意されています。船長主催のカクテルパーティー、フルコース・ディナーの後は、この夜のメインショー、アルゼンチンが生んだ今世紀最大のギタリストとの呼び声も高いペルーサ・タクナウのコンサート。ギターの超絶技巧は、さすがという他はなく圧倒されますが、そこはうまく日本語の歌も交えた親しみやすい曲目が続き、大盛り上がりです。

今回の屋久島クルーズなら、10万円くらいから参加できます。2泊3日で屋久島往復と全ての食事と宿泊、それにナイトショーがついていけば、それほど高価ではなく、プチブル気分を気軽に楽しむことができるのです。

ショーの後は、ソーシャル・ダンスタイムやカジノが開かれます。聞くところによると、船長をはじめ、カッコいい制服を着た男性クルーが、おばさま達を誘ってくれると言うから、これまたたまらないのでしょう。今回はカジノに入り浸ってしまったので、次に機会があれば是非とも社交ダンスデビューをはかりたいものです。

カジノは、もちろん現金をかけるわけではありません。各部屋に\$10,000の子ども銀行券のようなにつぼん丸カジノ専用のお札が配られており、それを持ってカジノに参加します。今回開かれていたのはルーレットとブラックジャックでした。夕方には、夜のカジノに備えてのカジノ教室も開かれ、ひとときの疑似ラスベガスナイトを楽しめます。お金にはなりません、たくさん勝ったら記念品がもらえるそうです。私は残念ながらすぐにすっからかんになってしまいました。そんなこんなでクルーズ船の夜は更けていきます。

翌朝は目が覚めたらもう馬毛島の脇に居て、屋久島がすぐ近くでした。モーニングコーヒーを飲みながら、文庫本を片手に、船でゆっくりと屋久島に近づいていくのは良いものです。

船が大きいせいか、入港にはじっくりと時間をかけ、朝9時半頃宮之浦の火之上山岩壁に入港しました。たくさん観光バスやオレンジ色のベストを着たガイドの姿が見えています。これから夕方5時の出航まで屋久島の旅が行われます。先に屋久島はどうでも良いと言ったことを書きましたが、乗客の中には去年の屋久島クルーズが抽選ではずれたが、今年はやっと参加できたという方もいましたので、比重はともかく屋久島も楽しみにしている方もいるようです。

そのためのオプションツアーが様々な用意されています。通常のオプションツアーは、4コース。①世界遺産の島 屋久島ぐるり1周(屋久島の海岸線を小型バス又はジャンボタクシーで1周=13,000円)、②屋久島満喫一日観光(ヤクスギランド、紀元杉+千尋滝のバスツアー=13,000円)、③屋久島温泉入浴(いわさきホテルで入浴、昼食+紀元杉、千尋滝バスツアー=13,000円)、④白谷雲水峡・原生林トレッキング(ガイド付き=15,000円)

またにつぼん丸オリジナルツアーとして「屋久島を楽しむ屋久料理を味わう」(文化村センター、千尋滝、茶屋ひらの、屋久杉自然館、紀元杉=19,000円)さらに限定5名プレミアムツアーとして「世界自然遺産の島に癒される時間」(千尋滝、いわさきホテルで日本丸オリジナルメニュー昼食、ヤクスギランド、紀元杉=28,500円)があります。食のにつぼん丸というだけあって、昼食はいわさきホテルや茶屋ひらのと豪勢になっているのが特徴でしょうか？

YNACではこれに刺激を受け、屋久島の森と人との関わりをテーマとしてヤクスギランドと自然館をまわり、昼食は安房川の流れ船で優雅な食事を楽しむという日本エコツーリズム大賞特別賞受賞ガイドによるプレミアムツアーを企画提案しています。

今回は2泊3日の屋久島クルーズのうち、屋久島までの片道参加でしたが、その魅力の一端に触れることができ、ちょっとはまってしまいました。皆さんも機会がありましたら是非一度お試下さい。

マルハナガタサンゴの産卵

松本 毅

2008年、国際サンゴ礁年ということもあってオオハナガタサンゴの産卵をビデオに記録しようと考え、6月6日中潮 月齢2.31 タンク下、6月22日中潮 月齢1.8.32 タンク下、7月17日大潮 月齢1.4.3 香附子をいずれも19:30ごろに潜って観察をした。しかしまったく兆候すら確認することができなかった。

昨年、同じ仲間のマルハナガタサンゴの産卵をビデオに収めることができた。2008年12月にサンゴの講演でお招きした沖縄のサンゴ学者の入川さん(琉球サンゴ君)にオオハナガタサンゴの産卵時期について質問をしたところ、満月の2~3日後の日没直後という情報を頂いた。そこで今年は、6月の満月から2~3日後の日没直後を狙うことにした。6月のはじめごろは水温が23~24℃だったのが、ちょうど7日あたりから急に上昇し、25℃を越えた。条件はそろった。

6月8日 大潮 日入19:19 満潮20:08 水温25℃
今月の満月は6月7日なので9・10・11日が狙い目。しかし、9日は屋久島ガイド連絡協議会の総会があるので潜れない。とりあえず8日に潜ってみることにした。19:33にエントリー。まだ薄明るい既に昼間の魚たちは寝静まり、テンジクダイの仲間が岩陰から出てきていた。

オオハナガタサンゴやマルハナガタサンゴには、昼間とは違って触手を伸ばしていることぐらいで、これといった産卵の兆しは見られなかった。

6月10日 中潮 日入19:20 満潮21:11 水温25℃
産卵し受精した卵、もしくは孵化した幼生が満潮から引き潮に変わり、その引き潮に乗って沖へ運ばれることを考えると、満潮時間前後の産卵となるのではないかと考え、満潮時間が21:11なのでゆっくり構えて19:42にエントリー。現場に着いてみると大変な濁りで前がよく見えない。普段、この時間には既に寝入っているはずのチョウチョウウオが昼間でもこんなに集まっているのを見ないのに、やたらたくさんチョウチョウウオが泳ぎまわっている。光に集まってくるプランクトンを食べているのだと思ったが、よく見ると1mmほどのピンク色の粒がたくさん漂っているではないか。ようやくこの濁りが精子でピンクの粒がサンゴの卵だと気づいた。慌ててオオハナガタサンゴを調べてみたが、8日と同じく触手を伸ばしているだけで変化はない。他の種類のサンゴを調べてみても特に変化は見られない。しかし、マルハナガタサンゴは、ポリプの中央の口の部分がやけに膨れているのが確認できた。この産卵は、マルハナガタサンゴであったに違いない。しかし、既に産卵は終わっていたようで放精・放卵をするところは確認できなかった。20:00ジャノメナマコの放精を観察してエキジットをした。

6月11日 中潮 日入19:20 満潮21:44 水温25℃
昨日の失敗を反省し、日没前18:51にエントリーする。19:02
既にマルハナガタサンゴにチョウチョウウオが集まっていた。盛んにポリプをつつついている。まだライト無しで撮影可能。何か匂いでもするのかマルハナガタサンゴのところだけに集まり、盛んにポリプをつつついている。
19:23 まだ薄明るい。



チョウチョウウオが激しく動き出す。いつの間にかチョウチョウウオはおびただしい数となる。回りを見るとマルハナガタサンゴのそこ

ろにだけ群れている。しかし、チョウチョウウオ以外にはツノハタタテダイが1匹混ざっているだけで他の魚は見当たらない。ベラの仲間などがいてもおかしくないのになぜだろうか?
19:30 ほぼ暗くなり、ライトが必要になる。



定点とした群体はポリプ全体が膨らみ、中央の口の部分がぷっくりと盛り上がりつつある。マルハナガタサンゴの群体の上がなんとなく濁りが出てきた。その中にはごくわずかに卵も混ざっている。
日没時間の10分後。いよいよ産卵が始まる。
19:34



あちこちで放精が始まり、急に周囲の濁りが激しくなる。定点の群体も放精を始める。煙のような精子が勢よく吐き出される。他の群体では放卵も始まったようで他の群体をライトで照らすと濁りの中に光の筋がで、卵が無数に浮かび上がる。
19:39



精子の放出の中に卵子が混ざり始める。定点の群体もこれまでは精子のみ放出していたが、精子の中に卵子が混ざり始める。
19:40



ますます濁りが激しくなる中、卵子の数も急激に増える。

19:42



放精よりも放卵する個体の方が多くなる。放出された卵子を盛んにチョウチョウウオがついばんでいる。放出した卵子がポリプの口の前にくっついたままになっているものやパンパンに膨らんだ口からぼろぼろと卵子がこぼれだすものなどまるで乱気騒ぎのようだ。
19:53



若干濁りが薄くなってきたような気がする。放卵も最終段階に入ってきたようだ。放卵を終えた個体はポリプ全体がしぼんでしまうので放卵を終えたものとまだのものが区別ができるようになる。
19:54



放卵する個体なくなる。放精放卵を終えた個体は小さくなる。定点の群体も放卵を終え、個体間に隙間ができるほどしぼんでしまった。
19:55 ほぼ終了と判断する。

6月12日 中潮 日入19:20 満潮22:18 水温23℃
水温が急に23℃に下がった。19時ごろ現場に行ってみるがまったく気配がなかった。別の場所でヒロクチダイノウサンゴの1群体が

産卵をしているが確認されたが、それ以外は産卵は確認されなかった。今回の産卵で気づいたことは、

1、産卵の開始のタイミング

6・7月の満月の2~3日後。今回の産卵が6月であったのは、水温が直前で25℃を越えたことが要因として考えられる。奄美大島や沖縄でも同じタイミングでミドリイシ類のサンゴの産卵が確認されたが、やはり水温が直前で24℃を越えた事が挙げられている。もし、水温が25℃に上がられなければ7月へ見送りであったかもしれない。

タイミングを合わせる要因として水温のほか、日照時間や月の光などいろいろ言われている。サンゴの種類によって満月の後であったり、新月の後であったりと様々である。種類によってはあまり満月や新月に関係なく産卵するものもある。オオハナガタサンゴやマルハナガタサンゴは満月の直前でこれはやはり月の光が重要な要因であると考えられる。最近、オーストラリアの研究者がサンゴの体内に光センサーがあり、満月の光が合図になると「サイエンス」に発表した。いずれにしてもいろいろな要素が絡んでいるようで、予想するのはなかなか難しい。

2、産卵の時間

大潮の2~3日後は、日没後に満潮が来る。満潮時は潮が止まり、受精しやすくなり、潮が引き始めると引き潮に乗って卵や幼生は沖に運んでもらえる。また、日没直後はサンゴに限らず、いろいろな魚もこの時間帯を狙う。飢えた昼間の魚は寝静まり、夜の魚はまだ目を覚まさない間隙を縫う作戦だ。10日は満潮時間を重視したためにタイミングを外してしまったが、マルハナガタサンゴは満潮の時間よりも日没の時間のほうを優先しているようだ。感覚として、日没が産卵の引き金であるような気がする。しかし、なぜチョウチョウウオだけがこの産卵を待っていましたとばかりに暗くなっても寝ることをせず、卵を食べにきていたのだろうか?

3、放精の後、放卵 バンドルとの違い

よく紹介されるサンゴの産卵はミドリイシ類が多く、ミドリイシ類は「バンドル」という精子と卵子の入ったカプセルを放出する。これは水面に浮上をして水面ではじけて卵子が受精をする。しかし、今回マルハナガタサンゴは、暗くなるとまず放精が始まった。あたりが白濁した頃に放卵が始まった。他の群体の精子が混ざり合った頃合いを見計らって卵子が放出された。バンドルは水面を目指して浮上するが、マルハナガタサンゴの卵子は、すぐに浮上をせず、精子の煙の中を漂っていた。これは、バンドル型ではなく、放精・放卵型の特徴ではないだろうか。まず精子を充満させておいて、そこに卵子を放ち受精させる。また、雌雄異体のハマサンゴは、他のオスの群体が放った精子がシグナルとなってメスの群体が放卵を開始するという研究結果があるそうだ。だとしたら、マルハナガタサンゴは、精子が充満することによって放卵が始まるという可能性もあるかもしれない。

4、自家受精の可能性

サンゴには雌雄同体のものと雌雄異体のものがある。雌雄異体のものは、群体はそもそも一個体が分裂して増えていくので遺伝的には同じ遺伝子である。クローンなので一群体はオスならすべてオス。メスならすべてメスになる。つまりオス群体・メス群体となる。オス群体は放精をし、メス群体は放卵をする。ハナガタサンゴ属は、雌雄同体である。一個体が放精をし、後に放卵をする。しかし、群体そのものは遺伝的には同じものなので放精・放卵をすると自家受精をしてしまうことになる。ところが、雌雄同体のサンゴは、自家不和合性という同じ遺伝子の精子を受け付けない遺伝的性質を持っているそうである。だからいろいろな群体が時期を同じくして放精をし、いろいろな群体の精子が混ざり合った頃に放卵をすることで受精を可能にするのであろう。

5、どうしてタイミングを計るのか

そこでいろいろな群体が一年の中でたったこの30分にタイミングを合わせて放精・放卵を行なうメカニズムを作り上げたのである。7月9・10日(満月の2~3日後)に再度観察してみたが、放精をする個体をいくつか観察できたが、放卵は観察できなかった。やはりタイミングとしては6月の11日がジャストタイミングであったようだ。このタイミングを決定している要素は先にあげた月の光、水温、日没、満潮時間など様々な要因があると思われるが、そのいろいろな要素をすべて体で感じ取り、タイミングを合わせているサンゴの生態には恐れ入ってしまう。

南半球の国から ~ニュージーランドレポート~

岡田 愛

Hokianga (ホキアング)

皆さんご無沙汰しています。3年前まで7年間、YNACで働いていました岡田愛です。お元気ですか？私は今、ニュージーランド北島のホキアングという地域を拠点に、通訳ガイドとして働いています。

ニュージーランド最大の都市オークランドから、さらに北上すること車で4時間。タスマン海に口を開く美しいハーバーと、その沿岸に点在する小さな集落群がホキアングと呼ばれる地域です。ここは、ニュージーランド先住民マオリ族の祖で伝説の航海士 Kupe が、今から約千年前その人生の大半を過ごした場所として知られ、今も住民の多くが彼を祖とする一族の人々です。最大のカウリ「タネマフタ(マオリ語で森の神の意)」を含め、数々の巨木が茂るワイポウアの森は、ホキアングから車で約20分。美しく資源豊かなハーバーや、この巨木の森とリンクした独自のマオリ文化や歴史が、現在独特の観光資源として注目をあびている地域です。

Family of Ancient Trees (古代木ファミリープロジェクト)

ところで、皆さんは「古代木ファミリープロジェクト」をご存知でしょうか？これは、ニュージーランド政府観光局の呼びかけで提唱された環境ネットワーク企画の一つです。地域固有の古代木が生息する自然豊かな地域を結び、環境をテーマに互いの地域の取り組みを学び、発展を目指した企画です。その第一弾として、2009年4月に屋久島の「縄文杉」と、ニュージーランド固有の樹木カウリの中で最大の「タネマフタ」が兄弟の契りを交わし、屋久島とホキアングの地域間交流がスタートしました。

地域の産業を支える要として、観光が大きな割合を占めつつある両地域では、その発展と共に、観光資源となる環境との調和をどのように図っていくかが大きな課題となっています。また、それぞれに豊かな環境を背景に生まれた地域固有の文化や知恵があります。これらを、地域住民はもちろんのこと、博物館施設やガイド、学生交流を通じて互いに学び合い、地域の発展に役立てていこうという試みです。まずは、近日博物館の展示交流がスタートする予定です。

第1回 YNAC ニュージーランドツアー無事終了！

2009年12月31日から5日間の日程で、YNAC企画「ニュージーランド・ワイポウア」ツアーが催行されました。この小原氏と私のYNAC師弟コラボが、実質民間レベルで初めての姉妹木交流と言ってもいいはず。はじめの2日間で私の職場でもある最大のカウリ森林保護区「ワイポウアの森」を訪れ、タネマフタを始め、この国固有の巨木の森を満喫されました。

フタを開ければ参加者の全員が YNAC 時代のリピーターのお客様。かつてお世話になった皆さんと、また仕事を通じて再会し、屋久島に詳しい皆さんとこうしてカウリの森を歩くのは、格別の喜びです。

Footprints Waipoua (フットプリント・ワイポウア)

私が現在勤めている Footprints Waipoua は、このワイポウアの森を、地元マオリガイドがご案内するガイド会社です。数年前まで、ホキアングは中心都市から離れ、失業率が高く、雇用の拡大が最重要課題の地域でした。そこに地元の有志が集い、地元の自然と文化を活かした観光産業の一つとして立ち上がったのが、このガイド会社です。

スタッフは全てが地元出身のマオリの人々。この地で生まれ育ったマオリだからこそ語ることのできる歴史や知識が、彼らの持ち味です。森にまつわる様々な伝承民話や、マオリ語の歌やチャントを織り交ぜ、森をご案内します。また、昼間のツアーもありますが、夜の森を歩くツアーがこの会社の大きな特色です。昼間は多くの人で賑わう最大のカウリも、夜は参加者だけの空間です。闇と静けさが五感を刺激し、彼らの歌や物語が、森を一層神聖な空間にしてくれます。

最後に

私はこのガイド会社で、日本人のための通訳ガイドをしています。言葉の壁を取り払うことで、屋久島と同様、このワイポウアの森をもっとたくさんの日本の皆さんが訪れ、この特別な空間を味わって頂ければと思っています。現在屋久島とあわせた様々なツアーも企画されています。是非下記のメールアドレス(日本語)へご連絡下さい。皆様のお越しをお待ちしています。

Footprints Waipoua : www.footprintswaipoua.co.nz

岡田愛(Ai Okada) : okada.ai@gmail.com



最大のカウリで森の神「タネマフタ」

ニュージーランド北島 ゴンドワナ森林紀行

小原比呂志

日本のニュージーランド

vs南の屋久島

エコツアーの歴史が古い欧米にとって、屋久島はどのように映るのだろうか？と思い、たまたま出会ったドイツ人のご夫婦に質問してみた。

「そうですね…。ミヤザキの映画の影響で屋久島の森はけっこう知られてますよ。『日本のニュージーランド』という印象でしょうか。」

なるほど。NZといえば、コケむした森は屋久島的だと聞く。そしてYNACを旅立った岡田愛ちゃんがいま北島で働いている。それもカウリ巨木で有名な原生林「ワイポウア」で。

2009年、折しもカウリの神木タネ・マフタと縄文杉との間に古代木ファミリーの契りがむすばれた。これは屋久島の森を体験した人たちに、姉妹であるカウリの森にも関心を持ってもらおうというアイデアである。いい機会なので、風の旅行社の嶋田さんと相談し、愛ちゃんの協力を得てツアーを企画することにした。

カウリのほかに北島で質の高い原生林を探すと、観光地ロトルアに近い「フィリナキ森林公園」が浮上してきた。後半はそこに決めた。

ゴンドワナの生き残り

今から2億年前、地球上の全大陸はくっつき合って超大陸パンゲアを作っていた。スギなど針葉樹の仲間は、そこでさまざまな種に分化して、世界を森林でおおうまでに大発展した。その後パンゲアは北半球のローラシア大陸と南半球のゴンドワナ大陸に分裂した。その時ローラシアで発展したのがスギの仲間、ゴンドワナで進化したのがマキ(ポドカルプス)や

カウリ(アガチス)の仲間だ。

さらにゴンドワナはニュージーランド、オーストラリア、南極、アフリカ、南米と分裂したが、それぞれの時点で栄えていた動植物を乗せて分かれたために、それぞれの陸塊には、各時代の生物相が色濃く残ることになった。

NZの特徴的な生き物は鳥である。鳥は恐竜の仲間でも唯一生き残ったグループだ。哺乳類(オーストラリアには単孔類と有袋類がいる)が発達する前に分離したので、鳥がさまざまな生活形態に進化したらしい。飛ばない鳥キウイなど風変わりな種が多い。

中生代の記憶を残す南半球温帯林の、最後の断片であるワイポウアとフィリナキを体験する。それは大げさな言葉で、ゴンドワナ大陸の歴史をたどる旅の端緒になるだろう。NZの森と「北のニュージーランド」屋久島の森とを比較することで、地球の「古代木ファミリー」は、その真の存在感を現してくれるのではないだろうか。

ワイポウアへ

2009年12月31日

9:30 南半球の強い紫外線とさすがに涼しい空気のオークランドに降り立った。全行程のアテンド担当するワイルドエッジの堀さんと合流し、ハイエースでホキアングへ向かう。今回のツアーの前半のプログラムは愛ちゃんの所属するフットプリント・ワイポウアにアレンジしても



ニュージーランド北島



巨木の太さ比べ。なんとタネマフタは歴代5位

らった。全体の手配はリアルニュージールランドの藤井さんである。

ハイエースは牧場地帯をゆく。屋久島に慣れた目には、ニュージールランドの木々にはなんとなく違和感が感じられる。妙に枝ぶりがよく、屈託なくのびのびと育っている。台風に対抗してずんぐりした姿になった屋久島の照葉樹林とはだいぶスタイルが違う。川の両岸はマングローブに覆われている。樹種はAvicennia marinaだけで、これは西表などにあるヒルギダマシと同じ種らしい。ちょうど北海道と西表島を合わせたような風景だ。

カウリ博物館

13:00ダーガビルに近いマタコへのカウリ博物館に到着。屋外に大きなカウリの土埋木が置かれている。湿地帯から掘り出されたものだという。昼食の後、館内見学。館長のベティーさんは屋久島を2回も訪れて大いに気に入ってくれている。屋久島からの企画だということで、歓待され、直々に解説していただくことができた。カウリ博物館は外観からは想像もつかないほど大きな施設で、歴史と林業に関する大規模だが丁寧な展示は見ごたえがある。

大きなホールの壁に、最大級のカウリたちの断面が描かれていた。最大の木は「ジャイアント・カウリ・ゴースト」。直径8.5m、周囲26.8mあったと言われていた。この木は1890年に火事で燃えてしまったらしい。2位はオークランドの東、コロマンデル半島にあった「ファザー・オブ・ザ・フォレスト」。周囲22m、幹高（地面から最初の枝下までの高さ）24mあったという。1870年頃倒れてしまったらしい。ただしこの2本は過去の記録にそう記録されていたものの、確認はされていない。3位で、公式に計測された中で最大の木は、ワイポウアの南30kmのトウタモエ山にあった「カイラル」である。周囲20.1m、幹高30.5mだっ

たという。この木は1860年に計測され、残念なことに100年ほど前の山火事で焼けてしまった。4位はワイポウアの「テ・マツア・ナヘ」16.4mで、縄文杉とほぼ同サイズで現存する最も太い木だ。5位が“森の王”「タネ・マフタ」13.8mである。

日本では巨木を胸高周囲（地上から1.2mの高さで測った周囲）で評価するが、NZでは木材体積で評価する。

名高いタネ・マフタは、幹高（一番下の太枝までの高さ）17.7mあり、最大とされる。梢高は51.5mもある。

ワイポウアのナイトツアー

オポノニで愛ちゃんが出迎えてくれた。ここではマオリの祈禱所であるマラエで伝統的な歓迎セレモニーをしていただき、感銘を受けた。我々も挨拶して「蛍」の歌をお返した（車の中で練習済み）。

ホテル前でプットプリンツ・ワイポウア社のガイドと合流。マイルス・デイビスが野に戻ったかのような迫力のビルさん（63歳）である。彼の運転でワイポウア森林公園へ移動。「カウリ・ウオーク」のナイトツアーが始まった。18:00開始だが、まだ明るい。ワイポウア森林公園は広さ2000haほどで、カウリ原生林としては最大のものである。

ビルはまず入り口で祝詞をあげ、歩き始める。道々それぞれの植物の使い道、主だった植物の特徴などが語られ、そのつど愛ちゃんがうまく通訳してゆく。短いコースが主にマオリ文化の視点からプログラム化されていて、なかなか面白い。森の中にはNZのシンボルであるヘゴ（木生シダ）が多い。

そして、カウリの巨木が現れ始める。4本のカウリが合体したフォーシスターズを経て、最後にテ・マツア・ナヘが現れた。太さではタネ・マフタをしのぎ、樹齢4000年と言われる古木だ。ここでビルと愛ちゃんが木に祈りの「謡」をささげる。

車に戻るとさすがにもう暗く、やっとナイトツアーらしくなった。最後に車で移動してタネ・マフタにゆく。

ビルも、それから後述のフィリナキのガイドたちもそうなのだが、マオリのガイドはツアーの初めに森へ入る祝詞（チャン

ト、のりと）をあげる。また様々な謡（うたい）があり、偉大な樹へ向かう前に神への挨拶として良い声でこれを謡う。日本人はこれをやられると、自然と畏まってしまうので、マオリの人には好感をもたれやすいらしい。

タネ・マフタの前でビルは、天地創造の神話をマオリ語で語る。堅く抱きあう天の父と大地の母を、間に挟まれた子供たちを代表して息子のタネ・マフタが無理やり引きはなし、世界を作り出したという、やや艶話っぽい神話である。

ワイポウア2日目

2010年1月1日

この日は終日愛ちゃんのガイド。一応お正月だし、昨日が忙しかったのでゆっくりして、まずホキアング湾口を見に行った。ホキアング湾は西海岸から細長い入り江になってノースランド半島を切断するように東へ入り込んでいく。湾口の南岸は火山性の荒磯、北岸は荒涼とした巨大砂丘で、それぞれ男神と女神なのだそう。外海をやってきた船から見れば、安全な入り江に入るための絶好の目印になるのだろう。

オポノニに戻り、アックスマン・カーニバルを見に行った。ウッドチップングは丸太を斧または鋸で切るスピードを競うパワフルな競技で、NZやカナダなど、世界の大木材生産地では盛んなスポーツらしい。ワイポウアの大森林を有し、かつてNZ有数の伐採地だったオポノニの町にもまたキコリ魂が残っているのである。このカーニバルにはウッドチップング世界チャンピオン、J・ウィンヤード氏が招聘されていた。その凄まじい腕前はまさに「斧を振るえば世界一」という感じであった。

午後はワイポウアの少し南にあるトラウゾン・カウリ・パークへゆく。ここは愛ちゃんが選んだだけあっていい森で、平坦な原生林は歩きやすい。森の階層構



トラウゾンカウリパークの愛ちゃん

成はボルネオの山手の熱帯雨林のような雰囲気、中高木層の梢をカウリの巨木が突き抜けて超高木層（エマージェント）になっている。中低木層には木生シダが多く特に黒いヘゴ「ママク」が目立つ。所々の解説版は現代的なデザインでかっこよく、屋久島にもこういうのが欲しい。

愛ちゃんの解説の中に、カウリのウィルス感染症の話があった。これにやられたカウリは全身から猛烈に樹脂（カウリガム）を分泌し、やがて枯死する。靴や水から感染して行くというのだが、正体ははっきりとはわかっていないらしい。

気持ちよく歩道を一周し、駐車場にもどって再びワイポウアへ向かう。

昨日のテ・マツア・ナヘに向かう道の途中から、第7位の巨木ヤカスへのトレールをゆく。例によって時間が押しているの、とどろき歩く。大伽藍のような森をゆき、ヤカスに到達。これは根元まで行けるので、その偉大さがよくわかる。紀元前くらいに太さで、すっきり伸びやかに巨大化した姿が好ましい。ただし森の中は光のコントラストがやけに強く、写真が撮りにくい。ホテルにはなんと19:00に戻った。食後に愛ちゃんが来てくれて、つもる話をした。

ホキアングを離れロトルアへ

1月2日

愛ちゃんと別れ、まずナイトツアーで写真が撮れなかったタネ・マフタに向かう。今回の講座は古代木ファミリー締結を記念する趣旨もあるので、やはりタネ・マフタの写真は欲しい。

次に愛ちゃんのアイディアで、カウリ森林再生プログラムに取り組んでいるテロロア族ワイポウア・ビジターセンターへ向かい、スタッフのベブさんの指示にしたがってカウリを2本植樹した。川をはさんだ向こう側に隣接して、ワイポウアの原生林が広がっているのがすばらし



「ヤカス」にて、小原

い。いかにも森を少しづつ広げている、という実感のもてるロケーションだ。名前を付けるように言われたので、一本を「E-HAU（風）」もう一本を「Ai（愛）」とした。意味を説明するとベブさんは「愛ちゃんの名前は、Loveという意味だったんですね…」と感慨深げに言った。

この2本のカウリの位置はGPSで記録され、植えた者も将来にわたって見守ることができるようになっている。売店で美しいリムノキの工芸品を買った。カウリの土埋木製品も素晴らしいが、これは屋久杉なみに高価だ。

一路南へ向かう。オークランドを過ぎ、夕暮れ迫るロトルアに着いたのが20:40。ここでリアルニュージールランドの鈴木藍さんと合流。ロトルアは湖畔にひらけた観光都市で、硫黄の匂いが立ち込め、郊外には間欠泉とマオリの文化芸術センターがある。まるで阿寒湖だ。

1月3日

フィリナキ

フィリナキ森林公園は北島に残された世界的に貴重な原生林で、南半球系針葉樹のマキ科と南極ブナ類が主な樹種だ。公園の面積は全部で約6万ヘクタール。屋久島より少し広いくらいだ。

ロトルアからフィリナキに向かい、ムルバラのDOCの駐車場で「フィリナキ・レインフォレスト・イクスぺリエンス（以下、WREXと略）」のスタッフと合流。クリス社長、ベノワさん、モアナ



フィリナキ原生林を飛ぶ

スイさんの3人だ。WREXの車でミンギヌイへ向かう。ここは伐採基地の跡地だ。北島の原生林伐採がいよいよ終盤にさしかかり、フィリナキが最後の砦となったときに運動がおこり、結果として5万5000haの原生林が残され

た。今日の午前中は短い森歩きツアー。マオリガイドのツアーは、ここでもまず祝詞から始まった。偉丈夫ベノワはここやかに言いつつ、時々目をかっと見開き、ウ、ハーッ！と気合いを入れ舌をがごと出す。「ハカ」で有名な戦闘的なポーズだ。いきなりやられるとけっこう怖い。

ルートはポドカルプス科の大木の中を、じつと歩きやすく続いている。樹皮もスタイルも屋久杉にそっくりな木はカヒカテア。スギそっくりの葉を持つのはリム。マタイやトタラなど貴重な銘木も点在する。これら巨木の合間に、中木層を作るのが木生シダなのである。ワイポウアに劣らぬ Gondwana 古代林の雰囲気は濃厚だ。

途中橋があり、下流側が柱状節理の小さなゴルジュになっていた。公園のパンフの表紙になっている「ファイティヌイアイ・キャニオン」だ。水はやや濁っているが、フィリナキは1800年前のタウポ火山の分厚い火砕流をかぶっているの、その影響かもしれない。ベノワもモアナも、フィリナキの沢の水はどこでも飲めると言っていた。たしかに水はとてもおいしい。

駐車場に戻ると、クリス社長がランチを用意してくれていた。テーブルには大振りなタッパーがいくつも並び、料理、フルーツ、ソースなどがたっぷり用意されていて嬉しい。白身の刺身をドレッシングであえたものはなかなか新鮮。静かなポドカルプス巨大林の中というロケーションで満足度は高い。

ヘリでキャンプへひとつ飛び

午後からはいよいよヘリコプターで原生林遊覧とキャンプへの着地だ。我々7人とWREX3人が3回に分かれてキャンプサイトへ向かう。ヘリは軽やかに上

昇する。フィリナキ川から分水嶺へ舞い上がると、果てしない原生林が四方に広がっている。急峻な谷の源頭が稜線につきあがり、崩壊地にヘゴの大群落が発達している。複雑に入り組んだ尾根をモエランギ川流域へ乗り越え、やがて下降する。森の中の小さな広場にヘリは事もなげに着陸した。

キャンプでは老婦人がにこにこして待っていた。キャンプ場の支配人クレアさんだ。彼女は夏の間このキャンプに滞在して、料理、清掃、管理全般を担当している。クリスマス休みで孫のエマ（中学生）もオークランドから手伝いに来ていた。ここロバートコリンズキャンプは、WREXがDOCから許可を取り夏季に開設している、いわばプライベートキャンプである。すべての資材はヘリで運搬し、恒久施設はトイレとシャワーだけらしい。

第二陣第三陣と到着し全員がそろそろ。驚いたことにテントは個室で、簡易ベッドが置かれてきわめて快適。

焚き火にベノワがギターを持ってきて、キャンプファイヤーに歌のタベとなった。

モスフォレストを往く

1月4日

7:00起床。

朝食をとり、ランチコーナーで各自好きなものをパンにはさみ、自分用のサンドイッチを作る。

8:30集合。クリス社長から道中の諸注意を聞き、出発。林床をシダにおおわれた美しいモスフォレストだ。ただ樹種が少なく、南極ブナの仲間ばかりが目立つ。高木はシルバーピーチ、ギャップの実生もほとんどはシルバーピーチのようだ。道はとても歩きやすい。

10:40ロジャーズキャンプに到着。クリス社長の解説によると、1880年、フィリナキに狩猟のためヨーロッパアカシカが放された。天敵のいないこの場所で突然自由になった彼らは増えに増え、生態系を破壊し始めた。1940年、ハンターが雇われ、アカシカの駆除が始まった。このキャビンはそのときの基地の一つらしい。

道は緩やかだが斜面はけっこう急で、数メートルも法面を切ったところもある。尾根部分には部厚いタウボ火砕流堆積物が露出している。その軽石を観察していると、その中に炭が埋もれている。炭化木だろう。火砕流に完全に埋没して、酸欠状態で、蒸し焼きになった木の遺体だ。

11:15スキップズキャンプ到着。雨が少し強くなり、ここでランチ。小屋の広場から周囲の森を見渡すと、立ち枯

れのような木が見える。ところが双眼鏡でよく観察すると、枯れているのではなく、サルオガセのような地衣類が着生しているために白く見えているのだった。

この利用者がどのくらいいるか聞いてみた。フィリナキ公園全体で年間5千人、今回歩いたコリンズキャンプからオカフ林道終点までのコースは年間2百人くらいなものだろうという。3日に2人である。静かなはずだ。

道はゆるゆると続く。一つ高さ20m程の支流の滝があり、そばの淀みに黒っぽいカモが2羽いた。フィオ（ブルーダック）である。これはNZ固有種で、山岳地の溪流に生息する貴重種らしい。岩を噛む急流の中を、首を水面下に入れたままにじり歩いて水生昆虫などを探すという、水禽のなかでももっとも水中に特化した種らしい。

ベース配分はクリス社長に任せていた。彼らはほとんど休憩やのんびり観察ということをしな。ちょっと休憩をとりましょう、と告げると、なんとクリス社長が「あと2分でゴールですよ!」というので、啞然としてしまう。それならもうすこしコケの良いところで時間をとるのだった。10分くらいかかってオカフ林道終点着。NZでは「あと2分」がよく使われるんだそう。それでもちょうど14:00。今日は珍しく予定通り。

装備を片づけ、ランチの残りなどほおばっていると、ベノワのチャントが始まった。みんなあわてて参列(?)する。終わりにみんなでホンギ（鼻をくつつけあう挨拶）をして、めでたく終了。DOC事務所で堀さんと合流し、WREXともここで別れた。我々を待っている間、堀さんはここで事務所のマオリのおぼさんの



左から吉村さん、糸井さん、真能さん、ベノワくん、西岡夫妻、クリス社長、鈴木さん。2010年1月4日 フィリナキにて

話し相手をさせられて、「日本人はまじめで良い人ばかりで感心だ。マオリは飲んで遊んでばかりだ」と、どこかで聞いたようなグチを聞かされていたらしい。ロトルアで鈴木さんと再会を約して別れ、一路オークランドへと走る。これで終了だ、と思ったら途中でタイヤ激バースト事件が発生した。これはタイヤ交換だけで済み、夕暮れのオークランドに帰りついた。

1月5日

一日がかりで成田へ帰国。さすがに9000キロは遠い。

今回のような森林系のエコツアーは、屋久島での自然体験がよい予習になって、短くても得るものの多い、面白い旅になる。台湾、ボルネオ、チェンマイと南下するコケの森モスフォレストをたどる旅は、赤道を越えてバリ島へ、そしてここNZまで来てしまった。

YNACを卒業した愛ちゃん、NZで地域の人々からも愛されて、屋久島の地域交流にあたって人材として活躍している。彼女の存在と心配りがなければ、ホキアングの地でこれほどリラックスしてさまざまなものに集中することはできなかった。有難いとともに誇らしい気持ちだ。

NZと屋久島とは、古代木ファミリー関係ということで、地域ぐるみの関係が始まっている。1億年前という古代に別れ別れになった森の壮大な旅を、いま人間の感性がつかないでいると考えると、その果てしなさに気が遠くなる思いだ。今後さまざまなことを考えながら、長いおつきあいをしたい。またほかの古代林もいずれ訪れてみたいと考えている。

屋久島の自然と昆虫たち

大森 繁

(岡山理科大学卒業 YNAC研修生)

「屋久島」と聞いて、巨大なスギの木がまず頭に浮かびました。天然のスギの木は、日本海に近く積雪の多い岡山県の北部、そして鳥取県でもよく見られます。鳥取県の智頭町（ちずちょう）はスギの名産地で、人工のスギ林がよく管理されています。岡山県側では過疎化や高齢化による人工林が荒廃しているところがあり、そのような場所ではセンチコガネやゴホンダイコクコガネなどの糞虫の仲間が多く見られます。人工林が自然林に戻りはじめ、イノシシやシカなど動物の個体数が増加してきていることが原因のようです。

以前から、スギの人工林と、自然林とはどのように違うのだろう、また植生が変わることで、生息している昆虫や動物はどう変わるのだろうかと思っていました。そして、それらの疑問を解決するために、スギ自然林の残る屋久島で調査研究してみたいと考えるようになりました。

2007年に初めて屋久島を訪れた際、ヤクスギランドで見たスギに衝撃を受けました。樹高にも圧倒されたのですが、樹幹に着生した様々な植物や蘚苔（コケ）類、そしてそこに生きる昆虫達の大きさ、種数の多さが、いつも目にしてスギ林のものとは全く違いました。

ヤクシマセミスジコブヒゲカミキリ



アギトアリ

名前の通りアギト（アゴ）が凄いアリ。アゴを閉じるスピードが昆虫界最速で、狙われた獲物はひとたまりも無い!?よくコケの上を歩く

は、ほぼ屋久島固有のカミキリムシです。本土に生息しているセミスジコブヒゲカミキリにそっくりですが、別種です。なぜかバリバリノキだけを食べます。研究用に採集した枯れ枝の一つから本種が羽化してきたために、その枝がバリバリノキだとわかったくらいです。もっとも本土のセミスジはいろいろな広葉樹を食べるので、本当にバリバリノキしか食べないのかわかるとは要調査だと思います。

ヨツスジハナカミキリは本土の普通種ですが、屋久島のは少し形が違うので亜種とされています。この虫はハチに擬態しています。黄色と黒のストライプ模様をもち、飛んでいる姿がアシナガバチそのものです。掴むとお腹を曲げて、刺すような仕草をするほどアシナガバチになりきっています。しかし葉にとまっている姿はそれほどハチには似ていません。

屋久島で採集した昆虫のうち特に記憶が鮮やかなのは、ミカドオオアリの女王でした。ミカドオオアリは朽木中に小さなサテライトコロニーをたくさん作る種ですが、女王アリはめったに見られるものではありません。その女王アリをとらえる事が出来たので、非常に嬉しかったです。

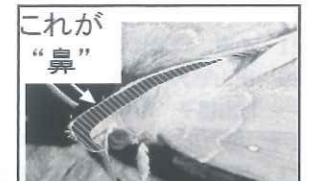
いまは特にアリに関心があります。屋久島で大型の哺乳類が見られないの



ヤクシマルリセンチコガネ

グリーンメタリックに光る森の宝石。実はシカやサルなど動物のフンが大好物。屋久島の森の掃除屋さん。

は、鬼界火山の噴火があったからだとも聞いていますが、アギトアリなどは島の固有種です。火砕流を生き延びたのでしょうか。アリはあらゆるところに生息し、地球はアリの星だともいわれています。屋久島は非常にアリの種が豊富な所で興味が尽きません。



これが“鼻”



ハナオイアツバ

このガは異常に長い“鼻”（下唇鬚 かしんしゅ）をモヒカン刈りのように後ろに背負っている。この“鼻”の役割は、複眼のためのワイパーだ、あるいはオスの長いのでメスのフェロモンを嗅ぐのだ、などと言われているが、はっきり解っていない。



ヒモカマキリ

宮之浦の街灯などにひっそりとやってくる小型のカマキリ。光に惹かれるというより、光に集まる昆虫を狙っている。ほふく姿勢が得意。

Calendar 2009-2010

2009

- 3/2-5 岡山三大学Triangle実習
 3/5-12 市川、風カルチャー「ブルネイ紀行」講師
 3/15-17 松本 日本エコツーリズム協会 (JES)
 10周年記念大会コーディネーター
 3/25 内室紀子 退職 お疲れ様でした！
 3/26 比留間雄大 研修開始
 3/30-4/1 市川 北海道大学調査・サンプリング補助
 5/23-25 松本、海風通倶楽部屋久島ダイビングツアー
 5/30 松本・櫻村、シャクナゲ登山のスタッフ
 5/31 松本、ダイビングクラブ「湯泊」
 6/4-7 市川、風カルチャー「シャクナゲと垂直分布」
 6/10 市川、立正大学屋久島実習
 6/15-19 小原、岡山理大屋久島全域のスゲ調査サポート
 6/17-24 比留間、うみがめ館ボランティア
 6/20-21 松本、ダイビングクラブ「口永良部島」
 6/21 小原、環境省自然に親しむ集い「コケ観察会」講師
 6/29～田山皓大 夏季アルバイト
 7/1～北山裕子 事務アルバイト
 7/3-6 風カルチャー「森から海へ」
 7/11～岡田愛、NZから臨時スタッフとして来島
 7/11 小原、鹿児島大法文学部博士課程実習で講演
 7/12 松本、ダイビングクラブ「タンク下・元浦」
 7/14 松本、屋久島観光協会海開きで水難救助訓練の指導
 7/22 屋久島で皆既日食。曇天で永田以外では見えず
 8/10～田中俊徳 夏季アルバイト開始
 8/27-30 小原、岡山理大付属中高の実習講師
 8/30 松本、ダイビングクラブ「栗生」
 9/1-4 岡山理大、「エコツーリズム技法」屋久島実習
 9/5～大森繁 夏季アルバイト開始
 9/16～台湾からの大量流木、SW前半まで高速船2週間欠航
 10/1-3 松本、葉山での安全講習会出席
 10/4 松本、東京環境工科専門学校スノーケリング実習①
 10/11 松本、ダイビングクラブ「栗生」
 10/12-14 市川、にっぽん丸クルーズ講師
 10/14-15 松本、東環工スノーケリング実習②
 11/21-23 松本、白馬エコツアーガイド養成講座講師
 10/25 小原、環境省自然に親しむ集い「高平岳」講師
 (悪天中止)
 10/30-11/1 松本、海風通倶楽部の口永良部ダイビング
 10/30 -11/2 小原、海外溯行同人総会に出席 (市房山)
 11/2 山の神祭り
 11/3-7 松本、佐渡のエコツーリズム会議講師
 11/8 松本、ダイビングクラブ「栗生」
11/9-25 松本、熊毛海域でモニタリング1000サンゴ礁調査
 11/27-28 小原、佐渡エコツーリズム協会の視察受入れ1
 2/1-2 松本・市川、(財)日本交通公社屋久島視察講師
 12/4 松本、西部地区保全利用作業部会
 12/7 市川、屋久島シーカヤック協会設立・副会長就任
 12/8 松本、黒島でモニ1000サンゴ礁調査
 12/9 松本、エコツーリズム推進全体構想策定部会出席
 12/9 松本、ウミガメ検討会

Contents

巻頭言『生業から正業へ』	1
思い出は美しく	2
スタートラインに立つ	5
にっぽん丸航海記	6
マルハナガタサングの産卵	8
南半球の国から	10
NZ北島 Gondwana 森林紀行	11
屋久島の自然と昆虫	15

12/26 市川、教員免許更新講習講師

12/30-1/5 小原、風カルチャーNZ北島ツアー講師

2010

1/6-15 市川・比留間、種子島自動車学校でⅡ種免許取得

1/22 松本、エコツーリズム全体構想策定部会

1/23 松本、種子島でエコツーリズムについて講演

1/28-30 松本、奄美大島で安全講習会講師

2/11-1 宮崎県西臼杵雇用協議会エコツアー視察受入れ

2/上旬 小原『屋久島ブック2010』解説をいろいろ執筆

2/19 松本、屋久島ガイド登録・認定制度作業部会

3/1 松本、小瀬田中3年に「ガイドという仕事」講演

3/2-6 岡山三大学Triangle実習

3/9 松本、慶良間エコツーリズム推進フォーラムパネリスト

3/31 大森繁、研修開始

4/11.18 市川にっぽん丸クルーズ講師

5/14-16 小原、鹿児島大法文学部「エコツアー入門」講師

5/19 松本、風の旅行社主催トークショー

5/21-23, 松本、能登でエコツアーガイド養成講座講師

5/30 松本、ダイビングクラブ「タンク下」

6/6-8 松本、鳥羽でエコツアーガイド養成講座講師

編集後記

仕事でいろいろな所へ行きますが、各地で屋久島に対する期待を感じ、襟を正しています(松) 家族の名前をイトカワに運んでもらいました。はやぶさ帰還おめでとう！(市) カメラを、使いこなせるように、なりたい！！(櫻) 学生時代に国語の授業をおろそかにしていた事を、今更ながら反省する(比) 夜のゴルフ場は昆虫のコンビニです(大) 新婚旅行でお世話になったガイド会社でアルバイトすることになろうとは・・・人生何が起きるかわかりませんね。(北) 大変間があき申し訳ありませんでした。カレンダーの長さにたどろたどるばかりです(小)

YNAC通信 (ワイナックつうしん) NO. 27

発行日：2010年6月25日

発行：(有)屋久島野外活動総合センター

鹿児島県熊毛郡屋久島町宮之浦368-21

TEL 0997-42-0944 FAX0997-42-0945

E-mail:forest@ynac.com URL:http://www.ynac.com